



JASWHS 公益社団法人 日本医療社会福祉協会
Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 28 年 9 月 12 日 第 6 巻 (第 5 号)

発行：東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル 2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

1. 今、石巻を思う（社会活動部メンバーからのメッセージ）
2. 石巻市・仮設住宅の集約化開始の報告
3. 熊本地震・益城町での災害支援活動に参加して（Ⅱ）
4. 災害支援チームからのお知らせ
5. 災害支援ニュース発行のお知らせ
6. あとがき

熊本地震で被災されたみなさま
心よりお見舞い申し上げます
復興への道のりがより短くなるよう
祈念いたします

1. 今、石巻を思う

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

社会活動部メンバーからのメッセージ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

2011年3月発災直後から当協会は遊楽館（福祉避難所）に会員をボランティアとして派遣し、現在は石巻市から委託を受け5名の現地職員が業務を担っています。本年4月熊本地震が起き、石巻支援活動の実績が福祉専門職においても「初動から先を見越して地域と協働することの必要性」と「平時から専門職団体相互の組織的な備えの重要性」を浮き彫りにしました。あらためて石巻での活動を総括し、災害対策要綱を見直し、ガイドラインなどの作成を急がなければという思いでいっぱいです。

（葛田）

2013年秋に5日間、北海道協会の派遣事業で当時の石巻拠点で活動させていただき、仮設住宅から復興公営住宅への転居支援にソーシャルワークが必要とされている状況を体感したことを、今も鮮明に覚えています。翌年には後輩MSWも現地で3日間活動したこともあり、石巻のことはニュースのたびに職場でも話題に上っています。現地職員の皆さんの日々の無事の任務遂行を札幌からも祈念しています。（上田）

2011年の発災から5年5か月が経過しました。今秋9月1日、石巻市立病院が再建し、診療開始されました。石巻市民にとって、また当協会が2011年9月まで活動していた遊楽館で一緒にいた石巻市立病院の医師や看護師・リハビリの方々にとっても、待ちに待った再建だとお察しします。当時一緒に活動したひとりとして、今回の再建のニュースは住民の方々と同じく嬉しい気持ちです。当協会は今も石巻市での支援を継続していますが、今後も石巻市、東北の復興に心を寄せ続けていきます。

（佐藤）

あの石巻市日和山公園の桜が「たい平桜」と命名されたと、24時間テレビで知りました。台風10号のニュースで、風雨にたたかれる石巻市の仮設住宅が映りました。何度か足を運ばせてもらった石巻の今を、私はどれだけ知っているのかしら、と思うと心細くなります。生活再建、災害弱者、原発避難、など、3.11以降クローズアップされた問題に、様々な立場で関わっている方との出会いを通して、行動のスタートは「知る」こと、そして「関わる」ことだと改めて感じています。これからも行動し続けたいと思います。（水溜）

石巻への支援から郷里の高知に帰ってきたとき、当たり前の日常になじめず、数日フワフワしていたことを思い出します。あれから私は、住まいを高台に移し、家族分の備蓄を備え、勤務先も災害拠点病院に移りました。それでも、日々の備えという点では自省することが多いです。自分にとっての災害の原点になった東北で、今もそのことに向きあっている住民の方々、支援者の皆さんがいることを忘れず、いずれ出会うといわれている南海地震に備えていきたいと思います。（前田）

2. 石巻市・仮設住宅の集約化開始の報告

仮設の集約化が始まります

災害支援チーム

石巻現地副責任者 畑中 良子

石巻市被災者自立再建促進プログラムが2016年6月に発表されました。これは被災された全ての方が一日も早く希望の持てる生活が送れるよう、現状と課題を整理し、自立再建に向けた具体的な支援を実施するために策定されました。

プログラム策定の背景には、震災から5年が経過し、未だに応急仮設住宅での生活を続けられている方が多くいるという現実があります。応急仮設住宅に入居中の世帯には再建先が決まらない世帯もまだまだあり、様々な課題を抱えた方への支援が急務となっています。一方、生活再建に向けた各種支援事業により再建先の住まいへの移転が進むことで、仮設団地の入居率が低下し、コミュニティや生活環境の維持が困難となる団地も増えている事が考えられます。

自立再建促進プログラムの中にプレハブ仮設団地移転・集約プログラムがあります。プレハブ仮設団地集約の基本的な方針とし

ては、

- ①孤立防止・防犯対策・コミュニティの維持
- ②学校溶離や民有地の返還、公園用地の復旧
- ③再建後のコミュニティに配慮した

仮設団地間移転支援

となっています。

今月から解消される団地と集約拠点になる団地の住民に対し説明が開始されています。

2016年5月時点で応急仮設の入居率は漸く50%を下回りました。入居率が30%を切った仮設は集約の対象となっています。今年度には133団地中25団地が解消される予定で、順次、説明会が行われ、10月からは移動が始まります。いよいよ仮設が閉鎖されていきます。そこで取り残されていく住民には孤独感、焦燥感、不安が襲いかかります。我々ソーシャルワーカーはその方のこれまでの暮らしを聴き、これからの暮らし方を一緒に考えて支援していきたいと思えます。



3. 熊本地震・益城町の災害支援活動に参加して（Ⅱ）

期間 2016年7月2日 ~ 7月11日

災害支援チーム

石巻現地責任者 福井 康江



一. 避難所で過ごす

避難所はコミュニティである。私はそうした視点で関る事がとても重要であると考えている。コミュニティには、学校があり、保育所があり、病院があり、交番があり、店があり、行政機関などがある。普段の生活で必要とされている機能が避難所ではどうなっているのか。こうした視点で避難所全体を見る事によって、足りない機能、必要な機能が自ずと見えてくる。

被災をしている状況で、不足している機能をどのように補い、代替えできるのか、経験や想像力、はもちろん、連携すること、繋げてゆくことが大きな力になることを、私は今まで一番強く感じてきた。ここ（はびねす）の避難所には、益城町の保健師を始め行政職員の方、清掃活動、炊き出し、ペットの世話に携わっているボランティア団体の方、毎日交代で駐車場の警備を担当している方、避難所の設備、備品等の調整を含む運営全体を担

当する県内外の行政職員の方、交代で訪問をしている介護・リハビリの専門職の方、などが協力して滞在してくれている。避難所が動いていることを感じた。

また、避難所はパブリックな場所でありながら、プライベートの空間も併せ持つ。そのバランスを考慮しながら“そこにいること”が必要となる。

そして、この避難所の中に居る自分、ソーシャルワーカーとしての自分は何者なのか、何をする者なのか。少しの焦りと共に深く息を吸い込む。まず浮かんで来た事は、この避難所の中で自然な存在でいること。一時的かもしれないが、避難所コミュニティの一住人として過ごすこと、であった。住人として、出会った人との挨拶はもちろん、何気ない会話をすること、飛ばされた洗濯物を掛け直すなど、普段の生活の中で行われていることをより心掛けることであった。



益城町保健福祉センター（はびねす）〔外観〕



保健福祉センター横のフェンス下土台部分の被害状況

二、出会う

2 日目の朝より、保健福祉センター（以下：はびねす）で行われている、外部支援者チームと市の保健師とのミーティングに参加させていただくことになった。鹿児島県、福岡県、島根県、兵庫県、京都府の保健師チームや、熊本 JRAT、熊本 DPAT、熊本 DCAT の方々などが参加されていた。保健師チームは避難所や仮設住宅をそれぞれ担当制にして巡回を行っており、他の団体はランダムに巡回訪問を行っているのだが、他の支援団体とも直接電話連絡ができるようになっていた。

ミーティングの中で、挨拶をさせていただいた後、町の保健師さんと私（日本医療社会福祉協会）の今後の動き方について相談させていただき、本格的な活動に入った。訪問準備として、姫野保健師からいただいた、避難所退所後先についての再調査が必要な 36 世帯の方のデータを元に、個票作成を行った。36 世帯の方の内、22 世帯の方は仮設住宅を申し込んでいたので入居の抽選結果が出るまで、残りの 14 世帯の方を優先に訪問調査を行ってゆくことにした。

日中、仕事や自宅の片づけ、通院などに外出されている方が多く、なかなかお会いできない方もおり、センター内の他のスタッフか

ら情報をいただきながら、会える時間帯の工夫も必要であった。お会いでき今後の話を伺う前には、その方がまず話したいことを聴かせていただくことに努めた。震災当時のこと、家族のこと、被災した自宅のこと、避難所での生活、そんな話が溢れた。「初めて話を聞いてもらえた。」と語られた方もおり、私自身が“一住民として居ること”がここで繋がった気がした。調査を進める中、「り災状況の再調査結果を待っている。」「家族との関係が悪化し、新たに家を探さなければならない。」などの話を伺った。中でも、「（一部損壊などで）り災状況から、仮設住宅の入居条件が無いのだが、家は住める状況ではない。修理したくても修理費の都合がなかなかつかない。修理を頼むにも業者が見つからない。」という声を多く聞く様になった。自宅での生活を取り戻す為、具体的な情報がまだまだ必要となった。

情報はセンター内にも溢れている。入口や壁、支援者の控室など様々な情報が掲示若しくは配布用に置かれている。しかし、相談窓口の様子や修繕業者関係の情報など自分の足で情報収集し、目で見るとはやはりどのような時にも必要であると感じた。情報収集の為に、役場、商工会議所、総合体育館を廻り、

職員の方からも話を伺うようにし、得た情報紙等のファイルを作り、被災時特有の手続きに関わる情報の為丁寧に読み解くようにした。

避難所退去後の行き先がないという、一人暮らしの高齢者の方からお話を伺うことになった。はびねすの避難所を担当している、兵庫県チームの保健師さんより、「その方には、地域包括支援センターのケアマネージャーさんが関わってくれているようだ。」との情報をいただき、兵庫県チームの保健師さんと一緒に、地域包括支援センターのケアマネージャーさんと話合いを持つことができた。また、ある避難者の方から話を伺っている時

に「お尻の所が赤くなっていて、少し痛い。」とのことを聞き、保健師さんに情報を伝え様子を看ていただいた。「やはり褥瘡になりかけている。」ということから、受診の確認と併せて、熊本 JRAT の方に連絡をし、現在使用している段ボールベットの状況をみていただいた。JRAT の方から、「起き上がりや寝返りが楽にできるように、ベッドに少し傾斜をつけましょう。」との提案があり、翌日早速作業にかかってくれた。本来なら、リクライニングベットを利用するところなのだが、JRAT の方は避難所の中での工夫に真摯に取り組んでいた。



段ボールベッドの上に、JRAT の方に手作りで作っていただいた、
段ボールのリクライニング



活動 4 日目に、「はびねす再開会議」に参加させていただき、避難所退所先が未定の方の再訪問調査状況について、資料を作成し報告をさせていただきました。また、毎日夕方 4 時から開催されている避難所ミーティングにも参加させていただき、避難者の方のその日の動きや運営に関することはもちろん、町内の避難所や支援活動に関する情報を伺えることになり、活動を続ける上で非常にありが

たいものとなった。このミーティングには、益城町の職員を始め、外部支援者として熊本県の職員、岩手県の職員、兵庫県保健チーム、そして石巻から私が参加させていただいたのだが、このメンバーがここ益城町にこうして集まっていることがとても感慨深く、活動最終日には胸が一杯になる思いを止められなかった。



益城町に、熊本、兵庫、岩手、石巻
被災地のメンバーが集う

9日間の活動の中では、支援の終結に繋がることは難しく、また、仮設住宅入居の当選結果も見ないまま活動を終えることにはなったが、次に同じ石巻から支援に入ってくれた岡村さんにその後を引継ぎ、支援を終えることとなった。町内では、数日前から被害家屋の解体や撤去が始まったばかりで、まだまだ地震の爪痕が残されてはいたが、益城町の、熊本の“これから”へ精一杯の祈りを残して行きたいと思った。

三 祈り

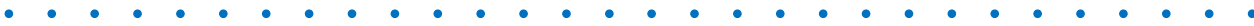
陸前高田市にある奇跡の一本松に、幾度となく私は勇気づけられてきた。変わらずにそ

こ居ること、居てくれることが、こんなにも尊くありがたい存在であることを被災地で思い知った。熊本では、紛れもなく「くまモン」がその存在になっている。SWとして、居てくれると思えるから頑張れる、勇気が出る、そんなふうに思って貰える存在でありたいと思い続けてきた。この思いが間違っていない事を熊本でも確認することができたと感じている。

この度、熊本支援に携われたこと、また新たにたくさんの方々と出会えたこと、つながりや勇気をまた一ついただけこと、これからも感謝と共に復興への祈りを抱え続けていきたい。



感謝：熊本県協会の皆様、宮崎県協会からの協力員の皆様、東京都協会からの協力員の皆様。
この度の熊本災害支援活動に際し、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。被災地の復興にはまだ時間が掛る事とは思いますが、どこかで又お会いできることを楽しみにしております。



4. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 協力員募集】

現 地

☆☆
☆ 引き続き以下の内容にて募集いたしますので、ご協力下さい。 ☆
☆☆

現在、1日にあたり上限2から3名で募集しております。

現地までの旅費・交通費は自己負担をお願い致します。

活動日程につきましては下記のようにお願い致します。

期 間： 平日3日以上、

受入日： 期間を満たす曜日（土、日、祝日は活動致しません。）

但し、上記以外であれば支援活動が可能な場合は現地担当までご相談ください。

※ 出発2日前までには（到着時刻等を含めて）は必ず現地担当にご連絡ください。

今後、活動に参加される方でその年度初回参加時には、簡単な資料を郵送致します。

ホームページに活動カレンダーを掲載しておりますのでご覧下さい。

事 務 所

引き続き募集しております。

平日のみの活動ですが1～2ヶ月に1回でも構いません。

ご協力お願い致します。

【2. 災害支援チーム会議開催のお知らせ】

次回会議日程

11月8日 予定

時間＝19：00～21：00 場所＝於協会会議室

【3. 書籍販売】

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』、

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』、

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』の

販売を行っています！

発災から 2011 年 9 月 30 日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトン I』に、2011 年 10 月から 2012 年 12 月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地 SW との協働の記録を『バトン II』に、



2013 年 1 月から 2014 年 3 月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地 SW との協働の記録を『バトン III』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。

(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

バトン I : URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

バトン II : URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47

バトン III : URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=54

[4. facebook]



facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いたします。

URL

<http://ja-jp.facebook.com/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部/156327867812970>

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。



URL

<http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be>

5. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回発行予定 9月下旬予定

6. あとがき

災害支援チーム事務局から

編集担当 西田



8月の末で東日本大震災後 2000 日となった。各メディアが特集を組んでいる。ある新聞に以下のような話が掲載されていた。【60代の女性は夫と一人娘さんとそのお子さん（孫）を亡くした。残された娘さんの婿さんが唯一家族だった。その婿さんはたびたびその女性、婿さんにとっては姑さん、のもとを訪れ、食事を共にし、思い出を語っていた。ある日その婿さんが、それまでの態度とはちょっと違う感じで、言いにくそうに、好きな人ができて結婚したいとその女性に告げた。「アッ、ついに来た」とその女性はその場を離れ、お風呂に入って思いっきり泣いた。どうしてもおめでとうと言えないという。】

考えさせられる記事である。60代の女性の気持ちもよくわかる。がその婿さんの気持ちもいかほどで

あろう。そして新しくその婿さんの妻となる女性の気持ちも想像するに難くない。考えるだけでもそれぞれの立場で気持ちが大きく異なる。各立場の気持ちを一人で考えると、それだけで破裂しそうになる。

今回畑中さんが仮設の状況を語ってくださっているが、仮設に住んでいる方々が一日も早く次の安定した住居に移っていければ一番いいのだろうが、全員がある程度満足して移るのは無理であろう。今まだ移っていない方々は様々な問題を抱え、様々な気持ちをもって、その気持ちをSWにぶつけてくる。現地で活躍しているSWの気持ちが破裂しないように、後方支援をさらに充実させなければと思う。



東日本大震災 MSW 災害支援ニュース
平成 28 年 9 月 12 日第 6 巻 (第 5 号)
作成 日本医療社会福祉協会
災害支援チーム事務局